

前奏	黙想	讃美歌	159	あおげや、輝く
招詞	イザヤ書 43:1	入会式		教団信仰告白および使徒信条
讃美歌	67	讃美歌	390	やさしく友をむかえよ
祈禱		献金		
主の祈り	564	讃詠	547	いまささぐるそなえものを
聖書	詩編 65:2~5	黙禱		
	使徒言行録 1:9~14	頌栄	544	あまつみたみも
讃美歌	157	祝祈		
説教	『神の庭にて』	後奏		
祈禱				

イエス最後の言葉は、復活し昇天する際に使徒たちに与えたもの。「聖霊が降ると～地の果てに至るまで、わたしの証人となる(使徒 1:8)」。「こう話し終わると、イエスは彼らが見ている内に天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった(使徒 1:9)」。これが快晴の日だったらどうだろう。最後にはケシ粒みたいになって消えるのか。私たちが立ち去る時なども、いつまでも見送られていると緊張してしまい、角を曲がって見えなくなるとホッとする。イエスの昇天も雲があってよかった。

使徒たちはいつまでも「天を見つめていた(1:10)」。雲で遮られた天空を呆然と仰ぎ見ていた。彼らはどんな思いだったか。「すると、白い服を着た二人の人がそばに立って言った。〔ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか〕(1:10~11)」。二人の天使は、同じように非難する口調で、イエスの墓へ行った女たちにはこう言っている。「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか(ルカ24:5)」。

二人の天使は、女たちに言ったように使徒たちにも「見る方向が違うだろ」とたしなめているのだ。「イエスは～同じ有様で、またおいでになる(使徒 1:11)」と天使は言った。女たちに対しては「死から命へ」、使徒たちには「天ではなく地へ」と視点の転換をうながしている。それでは天ではないこの「地」とはどんな所なのか。私の勝手なイメージだが、いつか私たちが死んで天の御国に昇る時には、誰もが清められて「シヅカニワラッテキル(雨ニモマケズ)」ような気がする。地は、そうではない。

エルサレムの「家の上の部屋(1:13)」が思い浮かぶ。ペトロら4人の漁師をはじめ、徴税人のマタイ(マタイ9:9)や慎重なトマス(ヨハネ20:25)の顔が見える。民族解放運動家のシモン(使徒 1:13)もいれば、ガリラヤから来た女たち(ルカ23:49)や母マリア、イエスの弟たちもぞろりといっているではないか(使徒 1:4)。

この「ゴチャマゼ感」が地上におけるキリストの弟子の姿ではないか。「天」が淡い水彩画だとしたら「地」はこってりした油彩画か。近づきすぎると混沌だが、少し離れて全体を眺めると、なんと陰影に富んだ人間の調和であろうか。教会の元型はこの「家の上の部屋(1:13)」だ、と私は思う。

使徒たちが、女たちが、母マリアとイエスの弟たちが「心を合わせて熱心に祈っていた(1:14)」。ゴチャマゼな人間がゴチャマゼなまま「心を合わせて」熱心に祈る。マタイはローマの徴税の下請け、シモンは帝国に反逆する正反対の立場だった。イエスの身内は無理解だったし(マルコ3:21,33)、使徒同士も競争心に煽られていた(10:37,41)。そんな彼らが「心を合わせて」祈っている。イエスの姿が消え、目を新たに転じたことで多様な祈りが一つにされた。聖霊の洗礼(使徒 1:5)を先んじて受けているのか。

「祈りを聞いてくださる神よ、すべて肉なるものはあなたのもとに来ます(詩編 65:3)」。祈りが一つになる時、被造物までもが調和し、黙禱が讃美となる(65:2)。「いかに幸いなことでしょう～あなたの庭に宿る人は(65:5)」。キリスト者がゴチャマゼなまま心を合わせて祈るあの部屋が「神の庭」、聖なる神殿(65:5)。「罪の数々がわたしを圧倒します(65:4)」。省みればそうだろう。「背いたわたしたちを、あなたは贖ってくださいます(65:4)」。どうやってか。十字架で、だ。十字架は神の庭に建っている。

神の庭に宿る 宿る者はいろいろで キリストの声に従った者もいれば その声に背いた者もいる 背いてもどういうわけか 心を合わせて祈っている 祈ると心一つになる あの十字架の傍らで
--

5/27(火)～28(水)は東海教区総会(静岡教会)、河野役員と牧師が出席します。次主日6/1の礼拝後に役員会、カレーの日です。今年の聖霊降臨日(ペンテコステ)は6/8(日)、聖餐式もおこないます。

礼拝堂・集会所の住所：408-0012 山梨県北杜市高根町箕輪 2265-3

連絡・問い合わせは牧師へ：408-0205 北杜市明野町浅尾新田 1324 TEL 0551-25-4008

eメールは komechan.olive@gmail.com HPは「日本基督教団八ヶ岳教会」で検索して下さい。